

末期腎不全患者における短期予後推定のためのリスク評価モデル探索

高齢化、生活習慣病罹患患者の増加等に伴い、保存期腎不全（CKD）から末期腎不全（ESRD）に至る患者は年々増加している。日本国内で毎年3万人を超えるESRD患者が新規に透析導入されており、導入時平均年齢は男性が68.37歳、女性は70.95歳と高齢化が進んでいる。導入患者における65歳以上の割合は69%、75歳以上が39%を占める。透析患者の総数も増加傾向にあり、2015年末で32万人を超えている。一方で、維持透析患者の総死亡数は毎年3万人以上であるが、このうち1割を超える患者が導入後1年以内に死亡している。

ESRD患者の療法選択を行う上で、個人差が大きく予測が困難であり、これまで明確な予後予測の指標が無く、療法選択の説明が医療者ごとに異なっている現状がある。特に認知症患者や担癌患者、多臓器不全などの、長期予後が望めないと考えられる患者については、これまで透析非導入を含めた意思決定についていくつかの提言が海外で刊行されている。さらに、具体的なリスクスコアによる予後予測が可能となれば、ESRD患者の療法選択について、患者・家族の理解度が上がり、QOLの向上が見込める可能性がある。

また、透析医療には透析導入を行う病院での腎臓内科医以外にも、シャント造設や長期留置カテーテル挿入等を行う外科医や、透析導入後の透析クリニックや療養病院などの施設の医療者等、多数の医療関係者が関わる。これらの医療者間の見解の一致を図る意味でも、リスクスコアの作成は有用と考えられる。

本抄読会ではESRD患者のリスクスコア作成についての先行研究および、本邦での透析導入患者の予後リスク因子の解析結果について紹介する。

主要文献：

Am J Kidney Dis. 2015; 66(6): 1024-1032: Predicting Early Death Among Elderly Dialysis Patients: Development and Validation of a Risk Score to Assist Shared Decision Making for Dialysis Initiation.

2008年末の慢性透析患者に関する基礎集計 p53-78 日本透析医学会